

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370318

研究課題名(和文) インド英語小説における職業表象の比較的研究

研究課題名(英文) Comparative Study of The Representations of Vocation in Indian Literature in English

研究代表者

梅 正行 (Toga, Masayuki)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号：10163958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、18世紀以降のイギリス近代小説と明治以降の日本近代小説に関する研究成果を踏まえ、インドの英語小説における職業表象、職業観を研究した。研究機関中3年間の焦点を、ムルク・ラジ・アーナンド、R・K・ナラヤン、ラジャ・ラオ、クシュワント・シン、V・S・ナイポール、シヴァ・ナイポール、さらに、その後の20世紀作家の複数の作品においた。ここではインド的な主題(植民地問題、分離独立、宗教)とインドを越えた各国、各地に共通の主題(紛争、価値の衝突、移動、移民、望郷、歴史観、人のたどりつくべき場所、伝統、新旧に関わる問題)を分析の上、文学というジャンルの問題発見能力を精査した。

研究成果の概要(英文)：This research is on the representation of vocation and the view toward vocation in the Indian novels written in English, with reference to English social novels since 18th century and Japanese modern novels since Meiji Restoration. During research period the focus is on Mulk·Raji·Arnard whose concern is vocation old and new, R·K·Narayan whose depth of penetration into vocation is outstanding, K·Singh who puts characters in historical contexts, V·S·Naipaul who focuses on those who do not have their own view toward vocation in postcolonial societies, and Shiva Naipaul who sees something behind daily jobs of ordinary people.

研究分野：英米英語圏文学

キーワード：ナイポール アーナンド ナラヤン ラオ シン 記憶 バックグラウンド 移動

1. 研究開始当初の背景

イギリス社会小説、また 20 世紀、21 世紀の小説のテキストおよび参考文献は、常時使用可能な状態にある。また日本近代文学の基本的テキストおよび参考文献も使用可能である。さらにインド英語小説のテキストおよび参考文献も使用可能である。ただし、インド英語小説に関する参考文献については、現在、陸続と出版が続いており、これを随時入手していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、職業表象という主題を、インド英語小説、日本近代小説、イギリス近代小説のそれぞれを対象に比較分析の上、研究する。本研究の最大の力点はインド英語小説における職業表象にあるが、そこに至るには、ヨーロッパ近代小説から説き起こす必要がある。近代小説とはそもそもヨーロッパにその起源をもつ。社会の近代化が進行するにつれ、近代の担い手たる市民は、自分たちの姿を映し出す芸術ジャンルを求め、小説にそれを見だし、小説を堪能し、やがて小説の手を借りて自己を形成するということまでするようになった。この市民と小説の合わせ鏡のような関係に時間が組み込まれ、一種循環関係が成立する時期は、世界各国によってことなる。本研究の射程にある三つの国にあっては、それぞれ、イギリスで 18、19 世紀、日本で 19、20 世紀、インドで 20、21 世紀にこの循環関係が成立した。イギリス 18 世紀には、Henry Fielding、Samuel Richardson、Lawrence Sterne、Jonathan Swift 等の大きな作家がすでに出そろった。しかしここで注目したいのは、これらの作家の作品名に職業名をもつ作品が見当たらないという点である。フィールディングの代表作のタイトルには「トム・ジョーンズ」という名前が用いられている。スウィフトの代表作のタイトルには「ロビンソン・クルーソー」という名前

が用いられている。この 18 世紀の時点で、イギリスの小説にあっては、人は職業人としてではなく個人として表象されていた。下って 19 世紀、イギリスは秀逸な作家を多数排出する。Walter Scott, Jane Austen, Elizabeth Gaskell, George Eliot, Charles Dickens, William Thackeray, Charlotte Bronte, Emily Bronte, Anne Bronte, Thomas Hardy といった作家だ。研究代表者の問題意識のありようを端的に示すため、一例として、ジョージ・エリオットの作品のタイトルを見る。最初の作品は Adam Bede(1959)。主人公の固有名詞だ。

同様に作中人物の名前をタイトルとする作品は Silas Marner(1861)、Romola(1863)、Daniel Deronda(1876)と三作品ある。これに対し最高傑作 Middlemarch(1871-2)は Coventry をモデルとして地名をタイトルとする小説だ。そうした作品目録のなか、ひとつ、いわば、どちらつかずのタイトルの作品がある。Felix Holt, the Radical(1866)だ。人名と「急進主義者」という言葉がならぶ。ここに個人と思想の両者をとりたいというエリオットの願望がある。この「急進主義者」という言葉は政治家という職業につながる。イギリス 19 世紀の人エリオットにあっては、「急進主義」も地名も気になったものの、やはり個人に力点があった。

次に日本に目を転じる。ヨーロッパ近代小説が移入された明治期、日本の近代小説も急速に成長を遂げた。夏目漱石の出る 19 世紀から 20 世紀にかけての時期には、『三四郎』(1908)という固有名詞を作品名にもつ作品が人気を博すにいたる。一方、職業名を冠する作品も大正から昭和の期間に散見される。たとえば、中野重治の『汽車の缶焚き』(1940)や『萩のもんかきや』(1957)だ。それぞれに職業をタイトルにもち、それぞれに個人を描く前に、職業そのものを描く。まず職業を描くことによって、その職業に就く人物の姿

をあぶり出す。日本近代文学のなかで、職業をタイトルにもつ作品は、いかなる意味を持つかという問題が、この背後に潜んでいる。

最後にインド英語小説を見る。インド英語小説は、その用語自体のなかに近代という概念を含み込んでいる。インドにおいて市民社会の成立は、第二次世界大戦後のインド・パキスタンの分離独立以後のことである。

インドは、イギリスの植民地支配のもと、インド全体を覆う言語として、英語を持たざるをえなかった。近代化の出発点に市民を描き出す言語として英語があった。英語はイギリス近代小説をつくりあげた言語であったので、英語の咀嚼が、イギリス文学の咀嚼が、インド英語小説をつくりあげる結果となった。

本研究では、インド英語小説をつくりあげた第一世代の作家たちの職業表象を研究の根幹に据える。具体的には Mulk Raj Anand と R K Narayan と Raja Rao の三名の作品を対象とする。三名のうち、研究代表者の論点を明らかにするため、1906 年生まれのナラヤンを例にとる。先に見たイギリス近代小説との比較で際立つのは、ナラヤンが小説のタイトルに学位ないし職業名を多く用いる点である。The Bachelor of Arts(1937), The English Teacher(1945), The Financial Expert(1952),そして The Guide(1958)だ。約二十余年に渡る執筆時期の間に、学位ないし職業をタイトルとする作品が四点並ぶ。それは当然、ナラヤンの職業観、ひいてはインドの人々の職業観を反映しているはずである。同様の問題意識から、時代順にアーナンド、ナラヤン、ラオ、さらに後続の作家たちの職業表象をその作品に見ることで、20、21 世紀、つまり近代インドの人々の職業観の変遷をたどる。

研究代表者の出発点には、エリオット、ディケンズなどイギリス、ヴィクトリア朝の社会小説の研究がある。また日本の近代小説読

解にあたっては、常に、ヨーロッパ、特にイギリス近代小説との相違を意識してきた。このふたつの研究の蓄積の流れの中にインド英語小説というさらにもうひとつの流れを合流させ、それぞれの作品に現れた作家、さらには国の職業観を浮かび上がらせる。イギリス近代小説についてはヴィクトリア朝の小説および 20 世紀の小説の全体像を把握しているので、ここに当該テーマに関連のありそうな作品群を次々と位置付け、職業表象という観点から、それらの作品の特色を明らかにし、さらに作家、時代ごとの職業観に迫る。日本近代文学については、研究代表者がイギリス近代文学世界に入る以前から慣れ親しんでいるもので、この読解を職業表象という観点から、学問的なレベルに引き上げ、位置付けを行う。インド英語小説については、三年間に、一年目はアーナンド、二年目はナラヤン、三年目はラオとわけ、その職業表象の特質を具体的に明らかにする。さらに年度ごとに、三名の作家の作品研究の過程で浮かび上がる他の作家たちの輪郭を把握し、さらなる研究への道を開いておく。

本研究の独創性を以下に箇条書きにする。第一に、未だ少ないインド英語小説に対する研究を深化させる。第二に、インド英語小説という表象を通じ、近代インドの人々の特質に迫る。第三に、そのなかでも、職業表象に焦点を当てることで、近代以降のインドにおける職業意識の一端を明らかにする。第四にアーナンドという日本ではまだまだ紹介の進んでいない作家の全体像を紹介する。第五にナラヤンという、一部でその紹介が進みつつも、紹介が加速しない作家の全体像を明らかにする。第六にラオという日本では未紹介の作家の全体像を提示する。第七に、職業表象という観点から、この三名と結びつきうる作家を発掘し、概要をつかむ。第八に、インド英語小説から遡及するかたちでイギリス近代小説に現れた職業観についての再検討を

行う。一例を挙げれば、ヴィクトリア朝の小説においては、紳士というひとつの理想型があった。こうした理想型をめぐる議論は、インド英語小説にもあるのか、あるとすれば、それはどのように変異しているか、あるいはインドの伝統のなかからすでに独立した理想型が形成されているか、といった問題群につながっていく。第九に、インド英語小説とイギリス近代小説のはざまに位置する表象群としての日本近代小説を、職業表象および職業観という観点から、再検討しうる可能性が生まれる。日本ではたとえば『三四郎』に代表される社会に自分の位地を定めようとする青年の物語があるが、イギリスとインドとの比較において、これまで見えなかった部分の発見にいたる可能性が生まれる。それはそのまま、小説という表象の日本の特質であるという指摘も可能とする。

以上、いずれも日本で未紹介の領域に入る研究で、そこからは独創的な結論が導き出せると確信する。第一に、近代インドの職業観の理解が深まる。第二に、職業をめぐる現実問題の背景に対する理解が深まる。第三に、そこからインドの職業全般をめぐる諸問題解決の糸口が浮かび上がる可能性が出て来る。

3. 研究の方法

ムルク・ラジ・アーナンドの職業表象。アーナンド研究の出発点としてまず代表作 *Untouchable*(1935) 研究を行う。この作品は、トイレの掃除人の一日を克明に描いた作品で、中編ながらインドのカーストの問題をわかりやすく読者に伝える。ここに示されたアーナンドの基本的な職業表象のかたちおよび職業観の研究を起点に、*Coolie*(1936)、*The Village*(1939)、*Across the Black Waters*(1939)、*The Sword and the Sickle*(1942)、*The Private Life of Indian Prince*(1953)などの作品研究に進む。職業を

タイトルにする作品から、タイトルから職業が消えて行くプロセスに、アーナンドの職業観の変遷を追う。アーナンドの経歴には、本研究の基盤をなすイギリス近代小説研究と密接に関係する点がある。学部の学生としてロンドン大学ユニヴァシティ・コレッジで、さらに大学院の学生としてケンブリッジ大学で勉強した点である。このころイギリスは、長いヴィクトリア朝の重圧から解放されつつも第一次大戦を経験し、激動の最中であった。アーナンドは当時ロンドンでケンブリッジ大学関係者を中心に生まれた文学・芸術愛好家集団のブルームズベリー・グループの人々と交流をもった。なかでも当時からインド鼻根でつとに著名な Edward Morgan Forster と交流し、フォスターは後にアーナンドの出世作『不可触民バクハの一日』に序文を寄せることになる。アーナンドには「インドのチャールズ・ディケンズ」という呼称がある。ディケンズがロンドンの下層階級や中産階級を克明にその作品に描きだしたのと同様、アーナンドもインドの貧しい人々の生活を描き続けたからだ。ふたりの作家の作品には、ともに近代小説の職業表象という本研究のテーマに取り込める研究材料が無数にある。

R・K・ナラヤンの職業表象。20代でロンドン留学を果たし、時のロンドンの最先端の文学グループとの交流のあったアーナンドとは対照的に、同じく英語で小説を発表していたナラヤンがロンドンの地を踏んだのは、50歳になってからのことであった。それまでナラヤンが小説で描き続けていたのはマルグディという架空の街であった。ナラヤンはマルグディの人々を描き続けた。ナラヤンの職業表象で特徴的なのは、研究目的に示した作品目録の一部からもわかるように、ある種、痙攣的に職業名をタイトルに含む作品が出るという点である。実際には、こうした作品の間に、職業名をタイトルとすることのない

作品も出版されており、なぜ、そのような振り分けを行ったのかという点も、当時のインドの社会状況や作家個人の作風の変化という観点から明らかにしていく必要がある。アーナンドの背後にフォースターがいたようにナラヤンの交流相手にイギリス現代作家 Graham Green がいたこともナラヤン研究を深める。

ひとつの街に焦点をあてて、ある種の年代記をつづるというかたちは、ロンドンを描いたディケンズにもつながる。場を特定の上、そこにさまざまな職業の人々を配し、物語をつくりあげていくという手法は、ともすると一定の職業に就く人々を類型化して描きかねない。そうしたタイプのなかに、作家の職業観、さらには作家の居住していたインド南部チェンナイの職業観すら垣間見ることができる。街という閉じた空間の表象を検討する意味がそこにある。閉じた空間における職業表象、職業観を検討して初めて、次のラジャ・ラオの作品に見られるような、開いた世界に身をおく作中人物たちの職業表象、職業観の意味を考察することが可能となる。ラジャ・ラオの職業表象。アーナンド、ナラヤンがインドとイギリスの関係のなかで小説を書いたのに対し、ラジャ・ラオは、フランス留学の影響を強く受けた。またアメリカ、テキサス大学などの教授として大学の世界で小説を書いていたこともその作風に影響を与えている。テーマも、職業にかかわるもののみならず、近代人の苦悩に関わるもの、近代的人間と前近代的人間との相克にかかわるものが入ってくる。代表作 *The Serpent and Rope*(1960)は、ヨーロッパとインド双方における真実探求がテーマで、ヨーロッパの側にいる妻とインドの側にいる夫との世界観の違いが浮き彫りにされる。当然のことながら、かれらふたりの世界観から、それぞれの職業観というものが派生し、職業表象は複雑な様相を呈する。ラオのかかえていた問題はすで

にインドやイギリスという固有の地域を越えていた。それは境界や国境のしだいにあいまいになった今日のコスモポリタンが共有しうるものとなり、研究代表者の終生のテーマである V・S・ナイポールのそれにもつながって行く。ラオを契機に、本研究はインド、あるいはインド系の作家の第二世代、第三世代へと展開する。

アーナンド、ナラヤン、ラオの職業表象から、第二世代、第三世代の職業表象へ。平成 27 年度後半の作業として、アーナンド、ナラヤン、ラオの職業表象をまとめて検討し、これを論文等のかたちで発表する。また第二世代の作家として祖父の代にインドからトリニダード島に渡ったナイポール家の作家 V・S・ナイポールの作品における職業表象との関連づけを行う。このテーマは平成 22 年度からの基盤研究(C) 応募課題「英語小説における近代表象の比較的研究—インドの英語作家を中心に—」に密接に関係し、すでにその方向性が定まっている。職業表象研究は、さらにインドの第三世代の作家たちをもその射程に入れる。1952 年という同じ年に生まれた Rohinton Mistry と Vikram Seth の二人だ。ミストリーははじめインド・パキスタンの分離独立をテーマにした作品を書いていたが、そこから *A Fine Balance*(1995) というディケンズを彷彿とさせるような全体小説に向かう。そこには無数の人物が息づき、かれらの職業は実に多様だ。Seth でこの作品に相当する全体小説は *A Suitable Boy*(1993) である。これは、ジョージ・エリオットやジェイン・オースティンの世界を彷彿とさせる大河小説だが、多種多様の職業の人々が登場するという点でミストリーの『*絶妙のバランス*』を凌ぐ。この二作品はいずれも、ムンバイやコルカタというインドの大都市を舞台としているが、その時代設定とは裏腹に、第三世代独自の職業観が投影されている。Shashi Tharoor の *The Great Indian*

Novel(1989)、Bapsi Sidhwa の Ice Candy Man(1989)、Shashi Deshpandi の A Matter of Time(1996)といった作品についても、適宜、同テーマによる研究を進め、第二、第三世代によるインド英語小説に対する理解を深めたい。

4 . 研究成果

本研究では 18 世紀以降のイギリス近代小説と明治以降の日本近代小説に関する研究成果を踏まえ、インドの英語小説における職業表象、職業観を研究した。研究期間中3年間の焦点を、インド英語小説、なかでも、職業に焦点を当てた作品を複数発表したムルク・ラジ・アーナンド、職業への洞察を展開したR・K・ナラヤン、職業と独特の距離をとるラジャ・ラオ、歴史的絵巻のなかにさまざまな職業人を配するクシュワント・シン、旧植民地に生活する職業観をもつに至らぬ人々を描くV・S・ナイポール、その弟である種の直感をもって職業、さらに職業の背後にある人間を見抜くシヴァ・ナイポール、さらにその後の 20 世紀の複数の作家の作品において、ディケンズ、エリオット、オースティンといったイギリス近代小説の作家達とシンとナイポールの職業表象、職業観については、共著書『刻まれた旅程』のなかで詳しく触れた。ナイポールについてはさらに共編著書『土着と近代—グローバルの大洋に行く英語圏文学』のなかで触れることができた。アーナンド、ナラヤン、ラオについては、それぞれの作家の作品の読解を終え、今後段階的に論文のかたちにする予定である。ここではインド的な主題(植民地、分離独立、宗教)とインドを越えた各国、各地に共通の主題(紛争、価値の衝突、移動、移民、望郷、歴史観、人の辿り着くべき場所、伝統、新旧にかかわる問題)を分析の上、文学というジャンルの問題発見能力を精査する。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計 3 件)

1. 「はじめに 偏在する土着、偏在する近代
はじめに 偏在する土着、偏在する近代」(共編著) 梅 正行、『土着と近代：グローバルの大洋に行く英語圏文学』、音羽書房鶴見書店、2015 年 10 月、3 頁-14。

2. 「移動する土着、移動する近代 V・S・ナイポールの作品から」(共編著) 梅 正行、『土着と近代：グローバルの大洋に行く英語圏文学』、音羽書房鶴見書店、2015 年 10 月、211 頁-243 頁。

3. 『刻まれた旅程：英文学から英語圏文学へ』(共著) 梅 正行、勁草書房、2015 年 3 月、 頁 - 頁、83 頁-265 頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

梅 正行 (TOGA, Masayuki)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号：10163958